

世界に冠たる農芸化学

北本勝ひこ

東京大学大学院農学生命科学研究科

明治44年、東京大学農芸化学科の鈴木梅太郎博士がビタミンB₁を発見してから今年で100年になる。これを記念して、いろいろな催しが企画されている。農芸化学の成果としては、この他にも藪田貞治郎博士と住木諭介博士による「稲の馬鹿苗病菌からジベレリンの単離」、田村學造博士による「火落酸（メバロン酸）の発見」など、この120年余の間になされた輝かしい成果は枚挙にいとまがない。最近の成果としては、高脂血症の薬スタチンや免疫抑制剤タクロリムスがあり、前者は世界で現在3,000万人が使用しているといわれている。まさに、「世界に冠たる農芸化学」である。

筆者が学生だった40年ほど前、この「世界に冠たる農芸化学」という言葉をしばしば聞いたように記憶している。農芸化学科を卒業後、醸造試験所で研究生活を送り、大学院重点化が終わった1995年に大学に戻ってきた。そのときには、学科名も農芸化学科から「応用生命化学専修、生物生産化学専修」に変わっており、さらに名称変更を経て、現在は「生命化学・工学専修」という名称になっている。新しい名称になってからも、4~5年は、進学してきた学生に対する専修の説明の中で、必ず「世界に冠たる農芸化学」という言葉を耳にしたものであるが、さすがに近頃は聞かなくなった。今や、農芸化学科の名称をとどめている見識ある大学は全国で1~2校となくなってしまっているようである。しかし、日本農芸化学会は、かなりの時間をかけて議論したものの、名称を変更せずに現在に至った。興味深いことに、その大会での発表数や参加者数など、学会のアクティビティを示す数字には低下の兆しはない。このことは、化学と生物学に基づいた「農芸化学」が、他に替わるもののない貴重な研究分野として厳然と存在していることを如実に示している。当時、学会名称変更のアンケートなどで候補に挙がった「応用生命

化学会」や「生命・食糧・環境学会」などに変更しなくて、ほんとうによかったと思う。

現在、筆者は生命化学・工学専修の学生実験委員長として、15年前に作成した実験書『実験応用生命化学』の改訂版の作成に携わっている。当専修で行なっている学生実験を反映したものとすべく内容を刷新する過程で、実験書のタイトルは以前の伝統的な『実験農芸化学』を復活することになった。また、生命化学・工学専修の学生の必修科目として、「農芸化学概論」なる講義を新たに加えることも、別の委員会であわせて検討されている。これは、「農芸化学のDNA」を若い学生に伝えることの重要性を教員が強く感じていることを反映しているものと思われる。ビタミンB₁発見100周年の年でもあり、「世界に冠たる農芸化学」という言葉の響きに共鳴される読者は、ぜひ身の回りで「農芸化学」の復活の活動を考えてみていただければと思う。当専修名が、将来的には、農芸化学専修という名前に変更されることも十分に可能性があると思っている。

サイエンスのグローバル化という名の下に、世界の大学がどれも同じような「金太郎飴」のようになりつつあると指摘されているが、このようなときにこそ、我が国で独自に進化発展した「農芸化学」が、古くて新しい学問分野として貢献できるのではないかとと思われる。もし、農芸化学分野で活動している多くの研究者が「農芸化学のDNA」を意識し、身近にある諸先輩の成し遂げた成果を掘り起こし、広く社会に紹介する努力をすれば、自ずから多くの大学で農芸化学という分野名が復活するかもしれない。農芸化学の真の重要性が広く若い人にも認識されて、「世界に冠たる農芸化学」に基づいた成果が日本から世界に発信されることを願っている。